

## 聖刻<sup>かりて</sup>ノ獵手・序

ちゃ、ちゃん

ちゃんちゃん、ぼり、ごん

ぼり、ごりり

夜更けの街道筋に轟く剣戟の響き

大剣振るう風切り音に、激突する銅と銅

鉄の兵の大立ち回りに

砂塵は舞い、敷石は抉れ飛ぶ

ずん

ずん、ど、ぼしん

足元揺さぶる衝撃に

童子シュウマはこの世の終わりと飛び起きた

敷石が壁に穿てし大穴より、昏き通りを覗き見れば

ひらりひらりとひらめき回る

巨人の刃の死の舞だ

やあ

やあ、卑怯なり

夜陰に乗じて昼間の仇討ちとは、操兵<sup>てのりかりて</sup>獵手の風上にも置けぬ

響き渡るは破れ鐘の声

あたかも巨人が鎧を纏い、怒りに身を震わせし策にも似たる

なんとこれは異なことを

獵手たる者、誇るは狩りたる首級の数なるや

加えて与えられたる輪廻をそそぐに

なんの正道たることぞ

おなじく破れ鐘の声なれど

長柄の斧構えし隆々たる体軀の兵には

いささか<sup>よこしま</sup>邪の響きあり

陰より見守るシュウマの目に

背を向け、大剣構えて立つその姿

音に聞こえしバル・アーカルマ

その<sup>かりて</sup>獵手たるシュウマ・キシルマのこれが出会いの物語

はてさて、いかなる始末と相成りますやら